

二〇一四 年度

J₁
国語問題

注意

- 一、試験時間は五〇分です。
- 二、「はじめ」の合図があつてからページを開くこと。
- 三、解答用紙に、受験番号・氏名を記入すること。
- 四、解答する文字はくずさず正確に書くこと。
- 五、字数制限のある問題については句読点を字数に含め^{ふく}めること。
- 六、解答用紙のみ提出し、問題用紙は必ず持ち帰ること。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。ただし、「」は語句の意味で、解答の字数に含めないものとします。

安岡章太郎編『私の文章作法』のなかで、富士正晴が、自分の原稿は、「編集者もよろこび、印刷屋もよろこぶような、削除や書きこみのほとんどない、推敲するところのほほ皆無に近い、書き放しの原稿」であると書いている。

私の原稿も、そうである。編集者と印刷者への敬意もなにがしかはあるのだが、それよりも、書き放しのほうが書きやすい。削除や書きこみで文章をいじくりまわすようなことがあれば、^①そのときはよほど出来がわるい。はじめから、だめな作品とあきらめて、捨ててしまうほうがいい。

昔は、私も文章を推敲した。文章というものは手を加えるだけ、良くなるものだと思いこんでいた。書く前にメモをつくり、メモにしたがつて書いていつて、さて書き終わると、何度も読み返しながら手を入れていった。そのころ書いたものは、いま読む気がしない。息苦しい、つくりものの文章である。頭だけで考えた文章だった。

或るとき自然に気がついた。書くことに集中しているときは、メモなんかあっても、どんどんそこからはずれてゆく。後もどりはきかない。無理にメモの筋へもどろうとすれば、文章が生気をなくしてしまう。文章は一つの生きものらしい。書く前に考えていたこととは別に、それ自身で生まれ育つてゆく。設計図にしたがつて製造される機械ではないのだ。書いているのは私であつても、生まれ育つたのは血のつながる子供のようなもので、私に似ていて、私ではない。機械なら出来上がったものの不出来なところを削ったり磨いたり、足りないところを加えたりすればいい。だが、生きものは、そうはいかない。

私はそのときから、メモと推敲をやめた。下書きというものもしない。書きはじめたら、それが本原稿であり、書き終わって読み返しはするが、ほとんど手を加えない。誤字を直すとか、小さな部分でのリズムをととのえるくらいである。

富士正晴は同じ文章のなかに、こう書いている。

戦前二十代のころ、好んで読んだアランの考え方がわたしを支えているらしい点もある。アランは文章の書き直しをほぼ

しなかった。彼に言わせると書き直しをする位だったら、新しく別のことを書く方が余程いいらしい。書く事が考えることだ、と彼がいつているかどうか知らないが、アランからそのようなことを、わたしの独り合点で、承知してしまったようなところがあるかも知れない。

② 私もアランを読んだ。私の場合は戦後だが、学生のころ繰り返しアランを読み、アランを真似てもいたので、知らない間にアランの考え方が私のなかに根づいていたかも知れない。とりわけ彼のスタンダール論である。スタンダールは書き直しをしなかった。『バルムの僧院』をバルザックのすすめで一部分書き直そうとしたことがあるが、スタンダールはその苦痛を誌し、書き直すことをやめている。いったん書いたものは、あとからは直せない、と。

頭で考えることと書くことは別である。書く前に考えていることと書きながら考えていることは違うのだ、といつてもいい。書く前に頭で考えてメモもつくついても、書きはじめたら、その通りにはならない。一行が次の一行を生んでゆく。谷崎潤一郎は、昔の人の言う言霊というものがあるのだと言っている。言葉には何か不思議な力があつて、それ自体でうごいてゆくのである。言葉のなかにあるその力に逆らったら、ぎくしゃくするだけである。あるいは、書けなくなってしまう。そして、その力によつて書いたものは、あとから変えることができない。

書く前にあらかじめよく考えるほうがいいのは、実用の文章である。オムレツの作り方を書くときには、実際にオムレツを作る手順を細部にわたつてよく考え、メモをつくり、その上で書くほうがいいにきまつている。それにしたがつて、いったん下書きをつくり、それを手直ししてゆくのもいいだろう。書き上がったものを、読む人の身になって、これでほんとうにいいオムレツができるかどうか、じゅうぶんに検討する親切さも要るだろう。まちがって読まれるようなところがないか、説明の足りないところがないかどうか。曖昧な部分はないか。用語は適切か。

実用の文章は、あらかじめよく考えて書き、書いたものは推敲するのがいいのである。オムレツの作り方にかぎらない。自動車の運転教本でも、会社の上司に提出する営業活動報告でも、市場調査の分析でも、物理実験の報告論文でも、或る社会の

構造を論じるというようなものであっても、また、経済学に関する新しい見方を提出するといった論文であっても、それは変わらない。書く前にすでにあるものを、できるだけ忠実に、正確に、明快に、文章に移しかえるという作業である。設計図があつて機械を作るのと同じである。製品は使用目的に最もよく合つたものでなければならぬ。仕上げも入念でなければならぬ。予定通りのものができなくてはならない。だから、実用の文章には、そのための文章技術が必要となる。機械製作に技術があるように、である。

文芸の文章は、そうではない。それどころか、実用の文章の技術を持ちこんだら、だめになってしまう。実用の文章も文芸の文章も一見同じ「言葉」を使うものだから、私たちはついどちらにも似たようなものだと思ひこんでしまうけれども、ほんとうは似ても似つかないものであり、別の世界のものなのである。^④ 実用の文章には技術があるが、文芸の文章には技術はない。実用の文章は予定通りに書かれる。書き手が前もって考えたことが文章という形につくり上げられるだけのことである。そのための技術である。書くということは、ちよつと面倒な作業にすぎない。上手に書き上げられたら、それでいい。

文芸の文章では、A であると、富士正晴が書いてるように、私も思う。すでにあるものを文章につくる作業ではない。書き手は、書くなかで新しい自分を見つけてゆく。一つの作品を書き終つたとき、書き手は書く前の書き手ではなくなつてゐる。富士正晴の文章は、次のように終わつてゐる。

……頭の中の考えより、文字文章という具体的なもの運動の方を信じるようなところもあり、どこへ行きつこうといひではないかというところもあり、つまりは大変すばらしい「いいかげん」のようなところもあり、大変現実的實際的なところもあり、あいまいなところもあり、正確で微妙なところもあるといったものだろう。自分を余り信じないことと、自分を絶対に信じるのが、ピッタリ貼りついてゐるような気がする。

野暮な解説をするなら、^⑤「自分を余り信じないこと」というときの自分は、普段日常の自分、表層の自分であり、「自分を絶

対に信じること」というときの自分は、自分の底にある自分、いつもは見えていない自分ということになるだろう。言葉の力にうごかされてゆくとき、思いがけない自分が出てくる。それでいいのだ、という自信である。

生まれてきた文章は、自分が書いたのにちがいはないのだが、おや、これが自分かと思うようなものを持っている。言葉の力を信じて書くときに、それまで見えていなかった自分が見えてくるのだと言ってもいい。

推敲というのは、しばしば、それを普段の自分に引きもどすことである。言葉の力にうごかされて書いていたときには、世間の常識とか暗黙のルールなどから自由になつていたのに、推敲をするときには表層の自分にある常識人が頭をもち上げてくる。ここはこう直すほうが分かりやすいだろうとか、こんなことまで書いてはまずいんじゃないとか、常識人の配慮がはたらきがちである。とりわけ、文章を書きなれない人の原稿を見ると、推敲によつて文章の力が弱められていることが多い。

なかでも多いのは、起承転結信仰である。起承転結は実用文の技術の一つであるのに、文章というものには起承転結がなければならぬと信じこんで、書き終わった文章に「結」がないと思うと無理にでも「結」を書き加える。私はここ一年半ばかりカルチャースクールのエッセー講座で受講生の作品をかなりたくさん見てきたが、余計な「結」に、よくお目にかかる。私は

B で終わりの何行かをばつさり切ることが多い。書いた本人に聞いてみると、その部分はたいいていと書き足している。

私たちは偶然にみちた世界に生きている。世の中のことは都合よく起承転結という型にしたがつて流れてはくれない。そのなかに生きる私たちの人生も、ここまでは「承」で、ここからが「転」という具合にはいかない。「**C** 先は **D**」である。誰も未来をあらかじめつくっておくことはできない。偶然と混沌（こんとん）入り混じつて区別がつかないさまに秩序を与えたいという気持ちは分からなくはないけれども、それはごまかしにすぎないだろう。この世界とそこに生きる自分に向きあうならば、それを切りとる便利な型などないと覚悟しなければならぬ。

起承転結という型にとらわれていたら、見えるはずのものも見えなくなる。闇の奥へ飛びこむことはやめて、その手前のと

ここで、

1

安心できる秩序をつくってしまうからである。それは

2

、世の中の暗黙の約束ごとへの妥協なのである。いや、妥協というのはいやいやならするものだが、自分からもとめてそこへ身を寄せてゆくのである。

文章を書くことは、そういう安全圏から踏み出してゆくことではないかと思う。

3

、ここでいう文章は実用

の文章ではないけれども、それは一つの冒険なのだ。どこへ行きつくかは分からない。地図も案内者もなく、お手本もなく、自分ひとりで知らないところへ分け入ってゆく。おそろしいことである。とともに、自由である。安全圏にいたときに自分を縛っていた多くのものから解き放たれている。書くことは、そのおそろしい自由を内にはらんでいる行為であろう。道具として使用する言葉は社会共有のものであり、言葉を使う上での約束ごとはある。日本語には日本語の約束ごとがあつて、

日本語を英語の構文で書くわけにはいかないし、

4

、書いた本人にしか通じない文字をつくりだすわけにはいかな

い。しかし、言葉というのは不思議なものである。社会共有のものであると同時に個人のものであるという、又「得体のしれないもの」のようなものだ。書かれたものは、暗号でないかぎり、その言葉を共有する社会のだれにでも(文字を読める人には)伝えられうる。誤読もふくめて、とにかく了解されるようになっていく。だが、同時に、書くという行為は社会の共通の約束ごとから自分を切りはなすことでもある。四六時中、社会とのつながりのなかで生きていないと不安な人にとって、それは淋しく、おそろしいことだろう。

書かないほうが幸せであるかもしれない。すくなくともそのほうが平穩無事であるだろう。文章を書くとしたら実用の文章だけを書いて、そのためには多少の技術も習得し、みんなが納得してくれるように起承転結という型にものつつて書く。それでいいのかもしれない。だが、それではすまない人間がいるのである。なぜ書くのかと聞かれても答えようがないだろう。彼または彼女は、危険にみちた冒険に踏みこんでゆく。世の中にはそういう人間がいる、というより、多くの人のなかにそういう人間がもう一人ひそんでいるのではないだろうか。書くきっかけが何であれ、書きだしたら人はそういう自分に出会ってゆく。書くということは、そういうことであるだろう。

問一 — 部①「そのときはよほど出来がわるい」とありますが、なぜですか。

問二 — 部②「アランの考え方」とありますが、それはどのような考え方ですか。

問三 — 部③「それ」は何を指しますか。

問四 — 部④「実用の文章には技術がある」とありますが、それはどういう技術ですか。「技術」につながる形で、本文から四十字以内で抜き出し、最初と最後の五字をそれぞれ答えなさい。

問五 文中の A にあてはまる表現を、本文から抜き出しなさい。

問六 — 部⑤「自分を余り信じないこと」というときの自分」とありますが、これを言い換えた表現を本文から抜き出し、三字で答えなさい。

問七 — 部⑥「言葉の力」とありますが、これを言い換えた表現を富士正晴の文章から探し、抜き出しなさい。

問八 文中の B にあてはまる語句を次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 要約 イ 推敲 ウ 添削 エ 検索

問九 — 部⑦「書いた本人に聞いてみると、その部分はたいていあとで書き足している」とありますが、なぜですか。

問十 文中の C ・ D にあてはまる語句を答えなさい。

問十一 文中の 1 4 にあてはまる語句を次のア～カから選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は二度使えません。

ア まして イ さぞ ウ とりあえず エ もし オ たぶん カ もちろん

問十二 — 部⑧「それ」は何を指しますか。

問十三 — 部⑨「書く」という行為は社会の共通の約束ごとから自分を切りはなすこと」とありますが、これによって得られるものは何ですか。本文から五字で抜き出して答えなさい。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。ただし、〔 〕は語句の意味で、解答の字数に含めないものとします。

「千里の旅、万巻の書」という中国のことばがある。その意味はいろいろに解釈できるが、私は自分で勝手にこう改釈している。

——千里の旅をすることは、万巻の書物を読破するにひとしい。

ところで、万巻の書物を読破するなどということは、私のような凡人にはとうていできないけれども、千里の旅なら、いまはジェット機の時代だから、けっしてむずかしくはない。そこで私は書物を読むようなつもりで旅に出る。そう思つて出かけると、世界は一冊の巨大な本のような気がしてくる。

たしかに世界は一冊の書物だ。旅をするということは、その巨大な本のページを繰つてゆくことである。私はこれまで、世界のかんりの地域を旅したが、それでも、まだ世界という書物の第一章も読み終えていないような気がする。私はときどき旅先で、いつたい、いつになったら読み終えることができるのか見当もつかないこの巨大な書物、世界そのものにめまいを覚えることがある。そして、旅とは、このように途方に暮れることではないか、と考へてみたりする。

なぜ旅が読書とひとしい意味を持つのか。言うまでもあるまい。旅は読書とおなじように、小さな自分の世界を大きくするからである。旅とは自分の住む井戸から脱け出て、世界は広いんだなあ、と実感することである。そのおどろき、そのとまどい、それがそのまま自分への反省につながつてゆくのである。

よく日本人は井のなかの蛙だと言う。たしかに日本は小さな島国だから、世間知らずになりやすい。けれど、人間というのは、どこに住んでいようと、じつは例外なく井のなかの蛙なのである。いや、そもそも、ひとつところに住むということが、すなわち井のなかの蛙になるということである。

むろん、井戸のなかでも、それなりに文化は生まれるであろう。が、文明の歴史は、人びとが井戸から脱けだすことによつて文化を發展させてきたことを教えている。人類はまさしく旅によつて文化をつくりあげてきたのだ。① 広い世界に出て、途方

に暮れることによつて。

旅をしてみても、おなじ人間でありながら、こんなにもちがうものかと、いまさらのように思い知らされたことがしばしばある。たとえば、インドでは葬式に涙は禁物であると教えられた。古都ペナレスのガンジス河のほとりで、私は何組かの葬列にあり、葬式にも加わったが、たしかにだれひとりとして泣いていない。葬儀に女性の姿をあまり見かけなかったが、インドの友人の話によると、婦人はつい涙をこぼしてしまうので遠慮するのだ、とのことであつた。なぜ泣いてはいけないのか。インド人にとって、死ぬということは母なるガンジスへ帰つてゆくことなのであつて、泣くべきことがらではないからだといふのである。

しかし、私がエジプトのカイロで目撃した葬列には、多勢の女たちが泣き叫びながら従つていた。あまりにも異様なその慟哭〔ひどく悲しんで、激しく泣くこと〕に、私は思わず立ちどまつて凝視〔じつと見つめること〕した。とたんに女たちは泣きやみ、私をきつと睨んだ。同行のエジプトの友は私にこう教えた。

「あれは泣き女たちです。彼女たちは葬式に雇われて泣いてみせるのです」

そうした泣き女という風習は、かつては中国でも見られた。葬儀という人生の最も深刻な行事においてさえ、人間はこうもちがつてゐるのである。ちよつとした仕草に至つては、そのようながいは無数にある。

日本人は子供の頭を撫でてかわいがるが、東南アジアの国々では、たとえ子供であらうと赤ん坊だろうと、頭に手をふれることをたいへんいやがる。頭は人間にとっていちばん大切な部分だから、そこに気安く手をふれることは侮蔑〔相手を見下してばかにすること〕にひとしいのである。日本人はスープを音を立てて吸うが、ヨーロッパ人はその音をきくと眉をひそめる。ところが、そのヨーロッパ人は食事最中に音を立てて鼻をかむのをなんとも思わない。また、日本人やアメリカ人は、人と待ち合わせて定刻を五分も過ぎようものならイライラしはじめる。そして、相手を三十分も待たせるなどということは、腹を立てるのにじゅうぶんな仕打ちであると考えられる。けれど、アラビヤ人やラテン・アメリカ人にとっては、三十分などという時間は人を待たせる最低の単位にすぎない。

このような例をあげてゆけば、きりが無い。世界というのは、それぞれの井戸の中に暮らす蛙たちにとっては、それこそ「反世界」の集合体なのである。世界を旅するということは、^②反世界を旅することなのだ。

私は何度か砂漠へ出かけた。旅ということばをきくと、どういうわけか私の胸中には空と砂とがひとつに溶け合った果てしない砂漠の光景が浮かぶのである。そのような光景が浮かぶと、つぎの瞬間、私はどうしてもそこへ我が身を置いてみたくなる。こうして私はまるで砂にたぐり寄せられるように砂漠へ旅立った。

なぜ砂漠にそんなに惹かれるのか。自分にもよくわからない。しかし、おそらく、砂漠というものが、私にとってはまったくの反世界だからだろうと思う。

たしかに砂漠は私たちの住む日本の風土の反対の極と言ってもいいであろう。和辻哲郎はあの有名な『風土』という書物のなかで、世界の風土をモンスーン型、牧場型、砂漠型の三つに分け、砂漠型を私たちの住むモンスーン型風土の対極に置いた。そしてモンスーン型の日本人がインド洋を抜けてアラビア半島にたどりついたときの衝撃を記している。その衝撃とは、「人間間いたるところに青山あり〔注一〕」などと考えているモンスーン型日本人が、どこをどう見まわしても青山など見あたらず乾き切った風土に直面したおどろきだと言う。

たしかに砂漠は、青山的な私にとって衝撃そのものだった。そこにあるのはただ砂と空だけなのだから。けれど、そうした砂の世界に何日か身を置いてみると、やがて砂は私になにごとかをささやきはじめた。そして、不思議なことに、こんどは自分が住んでいるモンスーン型の日本の風土や、そこにくりひろげられている生活が「反世界」のように思えてくるのである。

砂漠には何も無い。何も無いということがとうぜんようになってくると、逆に、なぜ日本の生活にはあんなにもたくさんものがあるのか、奇妙に思えてくる。あんなに多くのものに取り巻かれなければ暮らしてゆけないのだろうか、と。もしかしたら、それらのものは、ぜんぶ余計なものではないのか。余計なものに取り巻かれて暮らしているから、余計な心配ばかりがふえ、かんじんの生きる意味が見失われてしまうのではないか……。

しかし、待てよ、と私は考える。生きてゆくのに必要なものだけしかないということは、文化がないということではない

か。生きてゆくうえに必要なもの、それを上まわる余分のものこそが、じつは文化ではないのか。文化とは、言ってみれば、余計なものの集積なのではないか。だとすれば、^③砂漠を肯定することは、文化を否定することになりはしまいか……。

それにしても——と私はさらに考えなおす。私たちはあまりにも余分なものを抱えこみすぎているのではなからうか。余分なものこそ文化にはちがいないが、さりとて、余分なもののすべてが文化であるわけもなからう。余分なものなかで、どれが意味があり、何が無価値であるか、それをもういちど考えなおす必要がありはしまいか……。

砂漠とは、こうした反省を私にもたらす世界である。砂漠は現代の文明社会に生きる人びとにとって、一種の鏡の国と言ってもいいような気がする。私は砂漠に身を置いた際に、ある探検家がしみじみと洩らしたつぎのことばをかみしめる。

「砂漠とは、そこへ入りこむさきには心配で、そこから出て行くときにはなんの名残もない、そういう地域である。砂漠には何も無い。ただ、その人自身の反省だけがあるのだ」

私は、^④砂漠に自分自身の姿を見に行くのである。

(森本哲郎『ゆたかさへの旅』より・一部改変)

【注1】 人はどこで死んでも青山(＝墳墓の地)とする所はあるから、故郷を出て大いに活躍するべきである、という意味。

問一 ——部①「旅によって文化をつくりあげてきたのだ」とありますが、どういことですか。旅とはどのようなものかも含めて説明しなさい。

問二 ——部②「反世界を旅する」とありますが、「反世界」とは何ですか。

問三 ——部③「砂漠を肯定することは、文化を否定すること」とありますが、なぜですか。

問四 ——部④「砂漠に自分自身の姿を見に行く」とありますが、どういことですか。

三

次の1～10の文中の(カタカナ)を漢字で書きなさい。

- 1 道路の(カクチヨウ)工事が始まる。
- 2 お手紙を(ハイケン)いたしました。
- 3 何が起こるか(ヨダン)を許さない。
- 4 理科の授業で(イデン)の勉強をする。
- 5 ピアノを(エンソウ)する。
- 6 職人の(ジユクレン)の技。わざ
- 7 ここは(センモンカ)に任せよう。
- 8 彼は(ウラオモテ)のない人だ。
- 9 二人は(オサナ)いところからの友人だ。
- 10 緊急きん時に(ソナ)える。

--

--

得	点

1	1
2	2
3	3
4	4
5	5
6	6
7	7
8	8
9	9
10	10
11	11
12	12
13	13
14	14
15	15
16	16
17	17
18	18
19	19
20	20
21	21
22	22
23	23
24	24
25	25
26	26
27	27
28	28
29	29
30	30
31	31
32	32
33	33
34	34
35	35
36	36
37	37
38	38
39	39
40	40
41	41
42	42
43	43
44	44
45	45
46	46
47	47
48	48
49	49
50	50
51	51
52	52
53	53
54	54
55	55
56	56
57	57
58	58
59	59
60	60
61	61
62	62
63	63
64	64
65	65
66	66
67	67
68	68
69	69
70	70
71	71
72	72
73	73
74	74
75	75
76	76
77	77
78	78
79	79
80	80
81	81
82	82
83	83
84	84
85	85
86	86
87	87
88	88
89	89
90	90
91	91
92	92
93	93
94	94
95	95
96	96
97	97
98	98
99	99
100	100

[illegible]

6	1
7	2
8	3
9	4
い	
10	5
える	